

On It's a Battlefield

—Amplification of Disbelief—

植木利彦

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

序

Stamboul Train においてG.グリーンの小説の主要なテーマの一つである「裏切り」と共に、彼のその後の作品の多くに見られる「社会と個人の係わり」、すなわち、政治は、政治を意識する、意識しないに関わらず、この20世紀の世の中では必然的に個人の生活や行動に影響を及ぼすものであるという社会的な一面が付加されていたことは周知の事実である。つまり、政治的な変化は社会に大きな影響を及ぼし、逆に社会的な変化も政治に大きな影響を及ぼすことになるのであるが、それ等の影響は単に政治、社会に留まらず個人の生活にまで及ぶということなのである。*It's a Battlefield* においてはこの社会的状況の変化が政治に、そして個人に及ぼす影響の大きさと深さを問題にしている。

グリーンがこの小説を書いた1930年代はヨーロッパ全体の社会がナチスの台頭に始まり、政治的、軍事的、人種的にも激動の変化の渦に巻き込まれ社会不安が高まっている時期であった。つまり、1929年のニューヨークの株価暴落に始まり、その結果、ヨーロッパの各国が保護主義的な政策に転換し、国際的協調を原則とするヴェルサイユ体制の権威と機能ははなはだしく損なわれたし、当時、既にイタリアにおいてはムッソリーニがヴェルサイユ体制に対する不満を表現し、ドデカネス諸島の獲得やコルフ島占拠事件などを起こしていた。また、ヒトラーは政権獲得以前からすでに民主主義を軽蔑し、ヴェルサイユ体制を非難して、それからのドイツ民族の脱却を主張し、政権獲得後は国際連盟と軍縮会議から脱退した。その理由をドイツにとって不公平な軍縮会議にとどまる理由はないとしているが、その本心は集団安全保障を打破し、ドイツに都合のいい同盟政策をとろうとしたものであり、ヴェルサイユ体制への挑戦であった。¹⁾

ドイツやイタリアの nationalism はヴェルサイユ体制という社会契約、いうならば、社会正義の中での nationalizm の運動ではなく、ドイツやイタリアにとってのみ正義である nationalism を強烈に発揮したのに対し、ヴェルサイユ体制という社会正義がヨーロッパ全体の政治、経済の安定のために正しく機能し、ドイツやイタリアの政権が民主主義を否定した独裁的な方向に向かう動きに対し矯正能力を発揮したのではなく、各国が自

国の問題のみに関心を寄せ、ヨーロッパの連帯による協力体制を編成することはほとんど試みられなかった。この不安の高まりに対し、「ヨーロッパ全体の国々が、国民が、ヨーロッパ社会の正義と秩序を守り、維持していくために団結しなければならないこの時期に、意識的に無関心を装ったり、社会正義と秩序を守りとおす決意を欠けば、ヨーロッパ社会の基盤となっている社会正義と秩序を崩し、社会的な不条理、不公平を生じせしめることになる。このような社会的な不条理、不公平は社会の構成員である個人の精神的な拠所を無くし、悲劇を生み出すのみならず、個々人を連帯感を欠いた孤独な存在に追い込み、延いては社会の崩壊を招くことになる」、との警鐘を鳴らす意味を込めてグリーンがこの小説を書いたとも考えられる。この小論では社会正義の欠如がどのようにして個人を孤独な世界に陥れるのかを分析してみたい。

不信の増幅

人間の社会では、人間に金銭慾や名誉欲といった欲望がある限り、絶えず小さな不正や不公平が存在し続けることは止むを得ない社会的現象であろうが、全体的には社会を正しい方向に方向づける道徳観や倫理観を包括した社会正義が社会全体の良心ともいべき矯正能力を発揮してきた。我々の社会を社会たらしめている法律、経済、政治、宗教、道徳、倫理等の総てはその社会に生きる人間の理性と感性に依存するものであるが、大きな社会変革の過程では古い社会的価値観が大きく変化する。時として時代の変化や政治、経済体制の変化によって社会的価値観が激変することがあっても、社会正義そのものは如何なる体制のもとであれ不変でなくてはならないし、そうあるように社会を構成する個々人の努力を求めると同時に、特に社会正義を維持する任務に携わる者、あるいは機関が良心的に機能しなくてはならない。とりわけ社会の構成員である個人を職業や教育、身分や財産、主義や宗教に関係なく法の下では平等、公平無私に取り扱うという観点から、法の運用、刑の執行に関しては特に慎重でなくてはならない。万人が法の下では平等であるということが社会正義の基本である。しかしながら、小説 *It's a Battlefield* の中で見られるごとく、ストライキ中のデモに参加した労働者もデモを規制している警官隊も共に興奮している最中、愚鈍にして誠実なバスの運転手であるジム・ドローバーの妻に警官が襲ってきたとジムが勘違いし、妻を庇おうとして意に反し、結果的にはジムが警官を殺害するという不幸な出来事が発生したが、そのジムに対する死刑判決は、この殺人事件に直接的利害関係にある殺された警官の妻も、死刑の執行を命令する大臣も、ジムの妻、ミリーも、そしてジムの弟であるコンラッド・ドローバーも、誰一人としてジムの死を望んでいないにもかかわらず、全く無関係な人々によって関係者の意向を無視した判決が下されるのである。それは殺人という行為に対し、現代社会体制、並びに社会体制の維持を計る階級の者にとって、彼等の築いた彼等にとって都合のいい体制を脅かす者に対する見せしめ的な懲罰行為とも言える単なる機械的な制裁の一形式であって、その動機、因果関係等を明確に

解明し、関係者の納得するような真に正義に乗っかって導き出された判決ではない。

....It was gentlesfolk who had broken in with the laws they had made themselves, earning the fees they had fixed themselves, hundreds of pounds going into their pockets while the trial went on. A death for a death — the law demanded this, but the law had not been made by Jim or Mrs Coney; again, it would be the politicians and the lawyers who knew nothing about the man they saved and cared less.²⁾

この裁判は、一見、正義に乗った公平な裁判のように我々の目に映るが、財力のある有産階級に属する者は腕のいい弁護士を雇うことが出来、ジムのような社会の人口の大部分を占める貧しい大衆には腕のいい弁護士を雇うことが出来ないのは正に不公平であると言わなくてはならない。のみならず、真理の追求がなされていない裁判は正に茶番である。国選弁護士を付けることによって形の上での公平さは保たれてはいるが、ジムの生死に係わる裁判を担当する国選弁護士にとっては、大事なことはジムの生命ではなく、実入りの少ないこの裁判をより金になる仕事に備えて腕を磨く修練の場とすることにある。裁かれる社会の底辺を支える貧しい人間の生命の軽視と社会的良心の欠如が我々の目に強烈に写るのである。

Ingenuity but not passion; the counsel nodded and becked and exchanged compliments; once they became a little acrid over *Rex v. Hindle*, but afterwards in the corridor Conrad Drover saw them arm in arm going off to lunch. 'Of course I hadn't a chance.' 'You did splendidly. I could see the solicitors were impressed.'³⁾

ジム・ドローバーの裁判の判決が血も涙もない機械的で無情なものであることに少なからぬ矛盾を覚えるのであるが、しかしながら、首尾一貫して総ての裁判に「目には目を」といった機械的に判決が下されるのであれば、「悪法もまた法なり」で仕方のないことであろうが、社会の存在基盤である社会的正義を最も強く擁護しなくてはならない国家的指導者とその刑の執行を個人や党の私利私欲、党利党略によって左右したり、労働運動に対する政略手段として利用するという不条理——グリーンという言葉を借りれば、正義なるものの不正義——に至っては何をか言わんやである。それが政治的な理由であれ、本人の無意識的な行為であれ、明らかに法に対する、すなはち、正義に対する挑戦なのである。この身勝手な行動がひいてはコンラッドに見られる個人による正義の遂行——実質的には復讐——という蛮行の誘因となるのである。しかもこの二人の行動の根底にある動機には同質のエゴイズムが感じとられる。しかしながら、このような矛盾、不条理は *It's a Battlefield* 全体を覆っている現象なのである。例えば、同じ労働者でありながら、貧しい教育のない労働者は安い賃金に甘んじ、他方、経財力のある教育を受けた者は高級を食むという矛盾

(多分に当時のグリーンの共産主義的な考え方によるもので、頷きがたいところもあるが)、盗品の証拠隠滅のため自ら店に放火をして儲ける商人、雇用者の気紛れで解雇されるのではと絶えず怯えていなければならない労働者の不利な立場等。則ち “It (i.e. injustice) was as much a part of the body as age and inevitable disease. There was no such thing as justice in the air we breathed,”⁴⁾ というコンダーの言葉は単なる個人的な規模ではなく、公的な規模にまで拡大された不正や不公平、不条理な事柄はこの1930年代の暴力と混乱の社会にとっては必然的な要素となってしまっていたことを認める言葉である。そしてそのことはグリーン自身が認めていることでもある。

I think that in the 'thirties one couldn't help being aware of what was going on, much more so than in the 'fifties and 'sixties or perhaps even during this last decade. One felt war quite obviously looming in Germany with the sinister prospects taking shape there. In England there were hunger marches, thousands of people were out of work. Fascism appeared with Mosley. When the blackshirts paraded, the police were there — to protect them. They tended to lay into the counter-demonstrators, which boded no good. You can find this atmosphere in *It's a Battlefield*.⁵⁾

社会の中で不正なことや裏切りが日常茶飯事的に行なわれ、人を導く指針となり精神的な拠所となるべき無形の社会正義が蔑ろにされている時に、大衆がその悪影響に汚染されないとは言えないのである。ビール國務大臣のような指導的立場にある人間の気紛れと、偶然的な出来事によって、社会の底辺に生きるジムやミリーのような人間の生活は絶えず大きく変動させられる状況に置かれているのである。新聞記者のコンダーはこうした事実をしっかりと認識している。

A Journalist was supposed to understand the working of the world, but Conder had spent his life in learning the incomprehensibility of those who judged and pardoned, rewarded and punished. The world, he thought, . . . , was run by the whims of a few men, the whims of a politician, a journalist, a bishop and a policeman. They hanged this man and pardoned that; one embezzler was in prison, but other men of the same kind were sent to Parliament. Conder, the revolutionary, became a little flushed with the injustice of it but he knew well enough that it was not systematic enough to be called injustice.⁶⁾

また、コンダーのような知識人でなくとも、大衆もこうした事実を動物的本能によって嗅ぎとっているようである。何故ならミリーは何時も kept “her happiness all the time in

mind because she knew it would not go on for ever.”⁷⁾ 彼女には、彼等とは全く無関係な世界が気紛れに彼等の生活の中に侵入して来て、彼等の生活を脅かす危険性が絶えず存在することを察知している。それ故、彼女のささやかな幸せを守ろうとする姿勢には反抗的な仕種が目につくのである。

Her happiness had always been shot through with touches of malice. Her husband contented with his job and his pay had been the Communist; not Milly, contented with nothing but his love, suspicious of the whole world outside. She had never believed that they would be left alone to enjoy each other. Her malice had been a form of defence, an appeal to other people to ‘leave us alone.’⁸⁾

ミリーによって象徴される大衆のみならず、支配階級に属する警視副総監やキャロライン・ベリーすら社会の法や秩序、制度や組織があまりにも一部の人間の勝手な意志に踏みにじられ、本来の使命を逸脱しているために社会に対する信頼感を失いつつある。その最も顕著な例がコンラッド・ドローバーの行動であると考えられる。即ち、兄とは違って頭の切れる彼の熱心な勉学と勤勉な勤務の結果、彼自身が夢にも考えていなかった課長のポストを手に入れたのであるが、これは正当な結果であって、少なくともここには社会正義が順当に働いていると考えられるのである。彼が望んで得た地位ではないにしても、一旦手に入れたその地位は彼の実力の正当な証明である故にその地位が、実力はなくても単に重役の甥であるというだけで、彼から奪い取られる可能性には彼は耐えられないのであり、そこに不正の存在を認識せざるをえないのである。そしてまた、日々の仕事に励み、ミリーとの二人だけの生活に満足している平凡で真面目なジムの何処にも殺人者の凶暴性、残忍さも認められないにもかかわらず、彼をごく簡単に極悪非道の殺人者と断定した裁判にも、同じく正当な社会正義が働いているとは考えられないのである。彼が、*England made Me* のアントニーのように不正の存在を普遍的なものとして認める立場に立つ人間であるなら、裁判における弁護人や判事の社会的良心の欠如もそれ程深刻に受け止めることはなかったであろうが、彼は、ミリーとの関係においても倫理的、道徳的な後ろめたさを強く意識し、苦悩する律儀な人間であり、社会的正義の存在を認める立場に立つ人間であるが故に、ジムの裁判における社会正義の欠如を許すことができないのである。それ故彼は、社会が正義を遂行しないのであれば、決して許されることではないが、自らその社会的正義を個人の力で実行しようとして、社会正義の象徴的な存在である警視副総監に罰を下す意味で命を狙ったのである。これは正に社会に対する不信感がその原動力になっている。

社会に対する信頼感を消失した人間はその最後の拠所として次に身近にいる人間への信頼感を抱く。何処なら人間は本来社会的な動物であり、太古より相互信頼と援助のもとで共同生活を営んできたのである。そしてその最も基本的な形であり社会単位、あるいは最小単位であるのが結婚によってできる家庭である。従ってここに生まれる、夫婦、親子、

兄弟、という関係は人間が最も信頼できる最も身近な社会単位でなくてはならない。しかしグリーンは “If justice is undermined, so is love.”⁹⁾と考えているようである。つまり、不正と不誠実が時代の特徴となっており、それが正常な状態である時代の社会に生きる彼等はその環境によって強く影響されざるを得ないのである。その結果、ミリーは、夫、ジムを愛しているながら、寂しさと女の性から、コンラッドはミリーに対する憐憫の情から、共に最愛のジムを裏切り、グリーンの所謂「分割された誠実」(divided loyalties)に苦悩しながら、孤独と自己嫌悪の世界に落ちていく。サロゲード氏は若いケイとの一時的な情事を楽しんでいるが、画家であったマーガレットとの結婚も世間向きの外交辞令的な言葉とは裏腹に、“a long, faithful and unhappy marriage” (p. 30)であった。コンダーの架空の結婚生活の話は、現実の結婚生活における余りにも多くの不幸を知り過ぎた新聞記者の理想的な結婚生活という夢への逃避であると考えられる。社会の法や秩序、配偶者や肉親までも信じる事が出来なくなったこの時代の人間は—どんなに愛し合っても、逢うことの出来ない以上、ミリーの不貞は時間の問題であることを認識し、不貞という事実からミリーも自分をも救おうとして監獄の最上階より飛び下り自殺を計るジムのように、意志的に望んでいるのではないにもかかわらず肉体的には不可抗力的にコンラッドと結ばれる関係に陥らざるを得ずコンラッドの腕の中で涙するミリーのように、空想の家庭生活に逃避する独身のコンダーのように、友を得たい一心で外国貨幣でコンダーの関心を買おうとするジェイルのように、現実の赤裸々な人間の限り無い苦悩に耐えられず観念的な思索、思想の世界に溺れ、ブルジュワ的な生活を営む似非共産主義者のサロゲートのように、社会の正義も信じられず、部下との意思疎通を欠き “constantly seeks to shelve his conscience-stricken pre-occupation with justice by the idea of loyalty to the system which he serves”¹⁰⁾ 副総監のように、夫に先立たれ見込みのない手術を受けるために一人病院に行くキャロラインのように、更には社会の、人間の正義の不確かさに翻弄される弱い人間の経験しなければならない地獄のような苦しみに耐えられず自ら辞職する監獄の教戒師のように—皆、孤独で詫びしい人生を送っているのである。

この詫びしさ、孤独感はひとえにこの現代社会に自らの命を投げうって信じることのできるもの、つまり、コンダーがミリーに ‘Ah, you’re another one of them. “All I want is justice.” All, think of that. As if justice were a pound of tea, as if it existed anywhere as it — ’¹¹⁾と云うように、正義が欠如している結果であり、我々の住む現代社会の不毛性の所以である。

It’s a Battlefield の中で唯一望ましい結婚生活であったと考えられるのは、キャロラインとジャスティン・ベリーの結婚であろうが、彼女はその姿、印象からしてミリーやケイとは異なった存在である。

..., the years could make no impression on that haggard brightly

painted face, whose beauty he could recognise more easily than other men because it had so often pitiably grimaced at him from the interior of Eastern shrines; ... She trailed about in odd timeless garments; always she gave the impression of being dressed consciously for a monument in a manner which might not seem ridiculous when the fashions changed.¹²⁾ ... : how can so cynical, so clear-sighted a woman bemuse herself with incense, Indian idols (there were several in the spare bedrooms), ikons (there was one on the staircase), pictures of the Virgin (they were everywhere)?¹³⁾

ケネス・アロットとミリアム・ファリスは “she is a survivor from the shipwreck of a more gracious era.”¹⁴⁾ と述べているが、彼女は、*It's a Battlefield* が執筆された1930年代のナチスの台頭と共にそれまでの価値観が総て崩れてしまった不安な時代とは異なる、人間の理性と社会がより信頼しえた時代の象徴である。即ち、彼女や副總監の持つ人間性とビール内務大臣や秘書の持つ人間性の相違が時代の相違を示唆しているといえるだろう。同時に、あらゆる虐げられた人々に対する彼女の強い慈善心を目の当たりにする時、我々は彼女の姿に聖母マリアのイメージを重ね合わせるのである。彼女の生きた古き良き時代と現代とに如何に大きな差異があるかは、ストレタム殺人事件の犯人が神を讃える言葉を口にする救世軍の将校であることが判明する時、正にナチスの台頭によって象徴される1930年代の不安と狂喜じみた人間性、社会性というその時代的精神を目の当たりに見る思いがする。

結語

It's a Battlefield は John Atokins が言うように、“the complete absence of some kind of spiritual consolation, however slight, is noteworthy”¹⁵⁾ である。グリーンが多くの登場人物を配し、ジムの死刑判決をめぐる各人の考え方、行動を全く独立して描きながら、各人の行為がそれぞれ人を介して間接的に、あるいは偶然的に影響し合っているそのイメージは、我々は全く孤独な世界で他人を気にせず我々独自の戦いを戦っているといたったイメージである。

“.... The truth is, nobody cares about anything but his own troubles. Everybody's too busy fighting his own little battle to think of the, the next man....”¹⁶⁾

その結果、各人の生は “All he (i.e. the Assistant Commissioner) knew was a sense of waste, of people dying and suffering uselessly”¹⁷⁾ という全く無意味な、虚無的な生となる。それが *It's a Battlefield* のエピローグの矛盾、破壊、無意味さ、といったイメージに繋がるのであり、その原因が社会正義の崩壊に集約されるとき、それを

無くした1930年代の社会の再建は他の何に求めても不可能であり、意味のないことと言える。この結果が Greene's lack of belief in a purely material solution to England's, and Europe's, problems is no doubt one of the factors that led him towards the novel's horrifying conclusion¹⁸⁾ ということである。1930年代は正に無意味さの権化であり、伝統的な価値観を根底から覆す戦争を予感させるような経済恐慌、日・独の国際連盟脱退、ナチスの台頭といった社会的な不安要素、軋轢があらゆる所に散見され、そのような社会状況をグリーンは、“the battlefield is the world of human affairs in which God figures very little or not at all”¹⁹⁾ と考えていたようである。逆にこのことはグリーンが *It's a Battlefield* に描いているビール国務大臣の栄誉や称号の追求、労働運動のような単なる物質的な利益の追求、共産主義者にみられる観念的な理論だけで一個の人間が生きられるものではなく、況して複雑な社会では構成員全員の協力と信頼の上に築かれた社会正義の存在無くしては社会そのものが存続できないのである。社会の根幹となる社会正義が不動のものであってこそ始めてそれに付随するより小さな社会単位の中に正義に基づく信頼関係が生まれるのである。その為に我々はいつ世も社会の不正と戦わなくてはならない。各人のその意識が社会的良心となって社会正義が維持される。社会を存続させる為には副総監が “dreamed of an organisation which he could serve for higher reasons than pay, an organisation which would enlist his fidelity because of its inherent justice, its fair distribution of reward, its reasonableness.”²⁰⁾ ような何か自分を投げうって信じられる精神的な支え、つまり、キャロライン・ベリーに見られるようなある種の信念の必要性を、うつろいやすい我々の社会である故に、グリーンは強調しているようである。

参考文献

- 1) 岡部健彦, 『世界の歴史』 20—二つの世界大戦— 講談社, 昭和53年、危機の30年代 (p.270~)参照
- 2) Graham Greene, *It's a Battlefield* London: William Heinemann & Bodley Head, 1975. p.100
- 3) *Ibid.*, p.59
- 4) *Ibid.*, p.62
- 5) Marie-Françoise Allain, *The Other Man: Conversations With Graham Greene* London: Bodley Head, 1983. p.90
- 6) Graham Greene, p.36
- 7) *Ibid.*, p.70
- 8) *Ibid.*, p.65
- 9) John Atokins, *Graham Greene* London: Calder and Boyars. 1957. p.40
- 10) Kenneth Allot & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* New York: Russell & Russell, 1963. p.88
- 11) Graham Greene, p.107

- 12) Ibid., pp.198-9
- 13) Ibid., p.204
- 14) Kenneth Allot & Miriam Farris, p.97
- 15) John Atokins, p.39
- 16) Graham Greene, p.201
- 17) John Atokins, p.39
- 18) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene* New Jersey: Barnes & Noble Books, 1986. p.120
- 19) A. A. DeVitis, *Graham Greene: Revised Edition* Boston: Twayne Publishers, 1986. p.55
- 20) Graham Greene, p.137

On *It's a Battlefield*

Toshihiko UEKI

*Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1990)

In our society, there is a main strength of rectifiable ability or social justice based on morality and ethics which comes to play to lead a society to the righteous way, even if we can find out many small strengths of injustice or unfairness everywhere in our society.

Every member of the society, especially high official persons who lead the nation, and such organizations as a court of justice must effort to obey and keep the social justice. If leading persons and such organizations commit or tolerate injustice or unfairness, then their acts will result in jeopardizing the social justice and yielding uneasiness and disbelief among the nation.

In this thesis I want to analyze what effect the society lost its social justice has on individual persons.